



信仰とは何ぞや

東京  
警醒社書店

020786-000-8

特52-544

信仰とは何ぞや

大谷 虞/著

M42

ABI-0612



259

441



THE EVANGELICAL LIBRARY

EDITED BY THE  
Rev. K. HOSHINO

WHAT IS FAITH

BY  
Rev. H. OTANI

○ 宣教開始第  
五十年紀念 傳道叢書

- ▲ 眞の神 山田寅之助君述
- ▲ 耶蘇の直說法 阿部清藏君述
- ▲ 神の現在 武本喜代藏君述
- ▲ 運命と信仰 柏木義圓君述
- ▲ 久遠實成の基督 平田平三君述
- ▲ 有情の神 光小太郎君述
- ▲ 信仰とは何ぞや 大谷 虞君述
- ▲ 最大の學問 デフォレスト君述
- ▲ 純福音 星野光多君述
- ▲ 神を知るの道 釘宮辰生君述
- ▲ 基督の救 露無文治君述
- ▲ 生命の福音 今井壽道君述
- ▲ 福音の眞髓 有馬純清君述

(其他續て刊行)

大谷 虞 述

信仰とは何ぞや

明治  
42 7 18  
内交

東京 警 醒 社 書 店



### ○傳道叢書發行の辭

本年は宣敎事業開始の第五十年に相當す。於此乎諸敎派は各自部署を定めて傳道運動に従事せり。此時に當りて吾人は明治十七年の頃諸派共同無宗派的傳道をなしたりし往事を回想して羨念に堪へざるものあり。然れども今日となりては各派既に其歴史と特色とを有す之を打つて一丸となし以て大舉傳道に従事せしめんこと固より二三有志者の力之を能くすべきに非ず。是れ吾人が筆を以て傳道するの方針を立て諸派有志者その勞を分擔して以て茲に本叢書を發行するに至りたる由縁なり。願くは大方の兄弟等が吾人の微衷を諒とし此等書冊を適宜傳道の用に供し同胞を神の國に導くの一助たらしめんことを。

明治四十二年六月一日

傳道叢書編輯者

星野光多

### 信仰とは何ぞや

大谷虞述

主よ我等に父を示はしたまへ、さらば足れり。

(約翰一四の八)

黄鳥は春歌ふ 雁は秋鳴く 人は神を信ずる。これは古の希臘の賢人エピクテタスの明言である。神を信ずるは人の持前であつて、信仰なしには決して居らるゝものでない。然るに今の世の人は信仰のある人を、何か人のせぬことをする並外れの人間の様に考へて居



る。大變な間違と云はねばならぬ。信仰が無くては濟まぬのが人の持前であるから、信仰が無いと云ふて居る人でも實は信仰を持つて居るのである。其人は自分が本統に分らぬのである。自分の持つて居るものに氣付かぬのである。言はゞ帽子を冠つて居りながら帽子々々云つて尋ねて居る様なものである。されば人は眞の信仰を取る前に先づ自分の所有して居るものを知らねばならぬ。自分が一向氣付かぬ間に、誰の心にも何時しか信仰の芽が生へて居るので、それを先づ見付け出して之を養ひ育て、眞の信仰に進ましむることが肝要である。

先づ私は問ひたひ。天地は我に仇するものであるか。將た我を助

くるものであるか。此事に關する世人の信仰は如何であるか。私は思ふに誰の心の底にも、天地が決して人の敵でない、安心して之に身を信託する事が出来ること云ふ信念があるに相違ない。破壊するものが天地の心でなく、建設するのが天地の心である。亡ぼすのが天地の心でなく、生むのが天地の心である。天地は恰かも慈母の様に萬物をはぐくみ育て居る。誰でも皆斯く信じて居る。此信仰が腹にあればこそ落付て日々を送つて行くことも出来るが、此信仰が無かるふものなら、一日と雖も安心して居れぬ譯である。元來人の生命はかよはひものである。パスカルと云ふ賢人は、此世に於て人は最もかよはき輩に過ぎない。彼を碎き亡ぼす爲めに此世界が武



具に身を固めてかゝることは要らぬ。一滴の水でも、一縷の蒸氣でも彼を殺すに澤山である云ふた。眞に其言の通りであつて、かよはひ脆いものである。搗てゝ加へて此かよはひ生命を亡ぼすものが何時我身を害するか少しも分らぬ。姿も影も見えない足音も聞こえない敵が忍び寄つて居る様なものである。何時其毒刃を胸に刺し透さるゝかも分らぬ。昔或僧が印西と云ふ人の許にて、垣根に咲ける朝顔の花に露のおけるが、折節風の吹きて露の落ち散りけるを見、うち涙ぐみ

みるやいかにあだにも咲ける朝顔の

花にさきたつ今朝の白露

詠じたと傳へられて居る。朝顔の花をこそ昔から果敢なき者の例に言ひならはして居るに、これはまた花よりも儂ない花の上の白露を人の身になぞらへて居る。弱い風にも露は危い。少しく強い風が吹て来て花が一揺ゆれるが最後露は忽ち落ち散るのである。露の生命を散らす風が何時吹ひて來ることやら少しも分らぬ。院の北面の武士として上の御覺めでたかりし佐藤憲清が出家遁世して西行法師となつたのは、彼の従兄弟が夜の中に寢死に死んだ事から、深く人の生命の頼み難きを悟つた爲めであるこのことである。眞に儂ない生命である云はねばならぬ。然に世の人は夜半にあらしの吹かぬことは誰も保證の出來ぬことも打忘れ、夕には朝を樂むで寢床に入



り、何の疑懼をも懐かずしてすやくと眠ることが出来るのは何故  
 であるか。脆い生命をつけ狙ふ敵が晝もなく夜もなく窺ひ寄つて  
 おると思ふてはそうは安心の出来ぬ譯である。また其上に人の運命  
 は不定である。何時そんなことが降つて湧ひて起つて如何な目に逢  
 ふことやら少しも分らぬ。言はゞ落し孔の澤山ある道を歩ひて居る  
 やうなものだ。一歩足を運んだら落し孔に落ちるか分らぬ。一寸先  
 は暗黒とは善く言つた諺である。斯く並べ立て考へて見れば、  
 此世の中はあふなつかしく始終びくびくして居なければならぬ様で  
 ある。然るに世の人はそうびくびくして居らぬ。安心をして生活を  
 營んで居る。どふしてそれが出来たものであるか。天地を信じて

居るからではないか。則ち天地の心を信じて居るからではないか。  
 安心の出来ぬ筈の身を以て安心をして居れるのは、信仰が腹の底に  
 あるからである。天地の心は決して我に無情な我に仇するものでな  
 い。安んじて其生命を信託することが出来るこの信念があるからで  
 ある。斯く考へ來れば此世に信仰を有つて居らぬ人はないことが分  
 ると思ふのである。

尙此天地の心について人は一層深い信仰を持つて居るのである。長  
 いものには巻かれる。此世の中は強いもの勝ちで、善人も悪人も差  
 別がないのであると云ふが、世人は決してさう信じて居らん。世の有  
 様は悪いものが勝ち誇つて、善いものが足の下に踏み躪じられて居



る例は、古も今も變らぬ人の世の常であるけれども、正直なる人の首には神が必ず宿る、正しいのものには最後の勝利が與へらるゝに相違ないご固く信じられて居る。神を信じないご云ふ人はあるふが、正義を信じないご云ふ人があるふか。恐らくは無いのであるふ。然らば其人は矢張神を信じて居るではないか。正義を助け不義を挫く力は則ち神ではないか。室鳩巢先生の駿臺雑話に「武運の稽古」と題せる一篇がある、運の稽古、題目からして中々面白い。今試みに之を鈔記して見やう。

「或時若き人々武藝の場より歸るさに、翁が巷へ來て例の文談に及びり。翁いふやう、武藝は各の家業といふべければ、常に稽古あるべき事なり。唯武藝ご武運ごいつれが重きことと思ひ給へる。翁は武藝より武運は重き事と思ひ侍る。其故はいかに武藝に達したる人なりごも、武運盡きなは何の詮かあるべき……然れば武運ありての武藝ならずや。各武藝の稽古あらば、先づ武運の稽古し給へかし、……座中ひとり、翁の仰事には候へごも、武運の稽古ご申す事こそうけられ候はね。むかしより人力の及ばね事なればこそ武運ごは申つれ。もし稽古にて及ぶごならは、誰か稽古せざるべきごいへば、翁かしら打振て、いや武運に稽古こそ侍れ……各思案して見給へ。運はいづくより出ることにて侍る。天より出ることあらずや。されば世話にも運は天にありご申候。ごかく運をば天に禱るより外はな



るべし。天の心に叶はんとならば、天の好める事は何事ぞ。悪める事は何事ぞと尋ぬべし。翁つらく天の好悪を案じ見るに、天は仁を好みて甚だ不仁を悪む。信を好みて甚だ不信を悪む……然れば人は外の事はしばらくさしおく。たゞ仁にして信だにあらば、おのづから天心に叶ふべし。天心にかなはずなごか擁護なかるべき。さりて暫く仁を行ひ假に信を守りて其驗あるべきにあらず。常に仁を好みて人をそこなはず。常に信を篤くして人を欺かず。かくしつゝ歲月を積まば、其誠天にこたへて、はからざるに自然の冥助もありなん……日ごろ稽古なくして祈禱厭勝の力にて武運を守らんと思ふこと、至ておろかなりと云ふべし。孔子も罪を天に獲れば禱る所なしとこそを宣へり云々」

こゝに天と呼べるは、正義の大法を以て人間を支配し、一人の誠にこたへて、はからざるに自然の冥助を與ゆる活物である。好むと悪むと云ふこともある。人の心懸と行の如何によつて賞罰を下す。これ活ける神ではないか。人は正義の大法があることを信するばかりでなく、之を世に行ふ所の力の存する事を信じて居るではないか。此信仰が無くなつたら世の中は暗黒である。善人は何を頼りに善を勵むか。義人は何を頼りに義に勇むか。此世に正義の力がありと信せばこそ、能く不義の力を戦ふことが出来るのである。また此信仰あればこそ悪人の心に一種の恐怖があるのである。影が身に添ふ様



に此恐怖は悪人の心に添ふて離れない。彼は何を恐れて居るであらふか。義人に頼む所があり、悪人に恐るゝ所がある。神を信ぜずと云ふ人にもそれはある。彼等は何を頼んで居るか、何を恐れて居るか、矢張神を信じて居るではないか。

以上二點は何人も異存の無いところである。此點から考へたならば、神と人とは切ても切れぬ深い縁があつて、人は如何にしても信仰を離るゝ事の出来ない所以が明白であると思ふ。しかし是はたゞ信仰の種に過ぎない。芽に過ぎない。之れに止まつて居つては信仰の名を付くるにも足らぬ程の者である。此心を育てゝ眞の信仰に進ませねば、悲哀に沈める者を慰め、弱れる者を強め、地に埋もれんとする靈

魂を天に引き上ぐる力がない。人の生活を支配して之を祝福するものでなかつたならば、信仰ありと雖も何の益にも立たぬのである。我等は如何にして眞の信仰を得ることが出来るであらうか。唯耶穌基督に行くにある。耶穌基督は我等に天の父を示したまふたのである。天地に心を安んじて信頼せしむるに足る情が籠つて居るか、義人をして頼らしめ悪人をして恐れしむる活ける正義があるとか云ふ様な信仰は、朦朧氣ながらに天の父の姿を我等に示すものである。そして我等の宗教性が自然に朦朧氣ながら見て居つた天の父は耶穌基督によつて鮮やかに示されたのである。言はゞ寫眞で見居つた親に直接出逢つた様なものである。今まで見ず知らずの赤



の他人が遽に親になるのではない。兼て其心に慕ひ焦がれて居つた眞の父親に逢ふのである。それゆゑに耶穌基督によつて天の父に接したものは、すぐれそれを知りて之を信ずることが出来るのである。耶穌基督によつて天の父上を紹介せられ、天の父上と相知り相交るに至つて眞の信仰の生活が初るのである。

さて天父に對する信仰の生活とは如何なるものであるかと尋るに、

(第一)は信賴である。基督は我等の頭の毛髪も亦皆數へらるご云ふた(馬太一〇)。天の父は我等の一人々々に深く心を注いで居られる。丁度幾人子があつても慈愛深き親は其一人々々の事を常に念頭に懸けて忘るゝ暇が無い様な者である。天の父上が我等のことに深く心を

くばり、夜も晝も守りたまへば、我等は少しも疑ひ惑ひ憂ひ恐るゝ事を要せぬ。何事も皆天父の慈愛ある御心に信賴して、如何なる境遇にあつても安心をして居ることが出来るのである。是も因果、是も運命と何の望があるでもなく、餘義なくあきらめて居ると云ふのではなく、天の父上は必ず善きに導き給ふべしこの確信と希望を以て、安んじて其時を待つのである。

(第二)は服従である。天の父上の限なき愛の御心を善く汲み取つて従順に之に従ふことである。天の父上は我等を教育して善きものとせられんとして居る。丁度金鑛を火に焼ひて吹き分ける様に天の父上は屢我等を逆境に陥れ、苦しい悲しい思をさせるのである。天の父の



慈愛を善く汲み取るここの出来たものは、どんな境遇の中にあつても、少しも眩くことなく、喜んで愛の鞭を受くるここの出来るのである。使徒パウロは身に苦しい刺が與へられて居た。其刺云ふのは何であるか善くは分からぬが、何様餘程彼の身に取つて苦しかつたに見える。彼は其苦に堪へずして三度之を取り去らんことを願ひ求めた。彼の身から刺は除けられなかつたが、刺を取り除けらるゝよりも遙かに大なる恩恵を受けた。我が恩恵汝に足れるぞこの聲を聞ひた。彼は苦しい刺が姿を變へた恩恵であるここのを知つた(哥後二一〇)。天父の意味深い恩愛は何事にも、何處にもあるので、此深き恩愛を汲み取つて従順に之に従ひ、神の御心に副ひ奉るは天父を信ず

るものゝ一日も忘れてはならぬ心懸である。

(第三)は奉仕である。天父の義しい御心は此世の中に行はれて居る。人間は己が罪を以て神の御心を遮つて、人の世は恐ろしい暗黒に包まらるゝに至つた。神は罪の爲に此世が破壊されるここのを深く嘆き給ふて、天に御心の行はるゝ様に地にも御心の行はれんことを求め、手を替へ品を替へ、暗黒の力を追ひ拂はんとして居られる。天父を信ずるものは此天父の心を心として、天父の御心の此世に行はるゝ様に力を盡さねばならぬ。人は各神に御奉公する爲めに必要な賜を與へられて居る。多く與へらるゝものは多く求められ、少なく與へらるゝものは少なく求められる。必ずしも世を驚かす様な大いこと



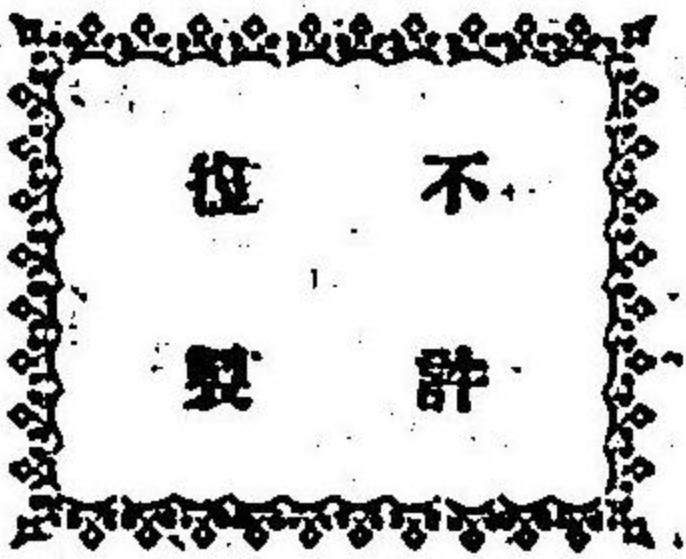
には及ばぬ。一生縁の下いっしやうえんしたの力持ちからもちをして、世間の目せけんめから見てはつまらぬ埋うらもれた生涯しやうがいを送おくらねばならぬ場合せあひもあるふ。それでも天父てんぷの御心みこころに明あきらに知しつたならば、甘あまじて隠かくれた骨折ほねきりをするのは眞まことの奉公ほうこうの志こころざし篤あつき人の心懸こころがけである。兎とも角かく人間じんげんの最もつとも大事だいじなことは天父てんぷの御心みこころを成なし遂とぐることである。故ゆゑに基督きりすとは我われを遣つかはしゝものゝ旨めがねに違たがひ其工わざを成なし畢おはる是れ我われが糧かてなり(約四の三四)と言いはれて、食しょくじ事を忘わすれて一人の亡はろび行ゆく靈魂たましいを神かみの御許みもとに引ひき返かへさんご全力ぜんりきを注そがれたのである。我等われらは生涯しやうがいの終すまひに於おて己おのが一生いっしやうを回くわい顧こし、天てんの父ちちが我われに成なせし命めいじ給たまふたことを我われは成なし遂とげたと言いふことが出来できたならば、我等われらの生涯しやうがいは成功せいこうの生涯しやうがいである。天てんの父ちちの前まへに出いでたとき、天父てんぷはあゝ善ぜん且かつ忠ちゆうなる僕しもべぞと褒ほめたまふのである。

以上三のこころを約つづめて之これを言いはゞ、つまり子こたるの道みちを盡つくすことである。天父てんぷに對たいする孝道かうだうである。信しん仰かうとは何なんぞやと尋たずねれば、天父てんぷに對たいする子心ここころの發動はつどう則すなはち孝道かうだうである。



信仰とは何ぞや終

明治四十二年七月十日印刷  
明治四十二年七月十日發行



著者 大谷 廣

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 福永文之助

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地 村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 警醒社書店

印刷所 電話新橋一五八七  
振替貯金口座三三番  
横濱市山下町八十一番地 福音印刷合資會社



△基督教談叢 (朝の巻) 紙數四百頁 郵定價金七十五錢  
 △基督教思林 (夕の巻) 紙數四百二十頁 郵定價金八十五錢  
 △基督教通觀 (聖日の巻) 紙數五百三十頁 郵定價金十錢

(星野氏修養三書)

△基督教辯証論 有馬純清君著  
 △基督教の本原眞理 露無文治君著  
 △聖書の價値 高橋卯三郎君著  
 △舊約聖書文學一斑 今泉眞幸君著  
 △福音書概論 山鹿旗之助君著  
 △保羅の著述 宮川巳作君著  
 △基督教の比喩 八濱徳三郎君著  
 △耶穌の三大觀 星野光多君著

---

△基督教の復活 小野弘道君著  
 △靈魂の不生 柏木義圓君著  
 △現世の生 山田寅之助君著  
 △現世の未來 武本喜代藏君著  
 △基督教の中心祈禱 星野光多君著  
 △事實として 柏井園君著  
 △基督教の小史 柏井園君著  
 △ジョン・カルウイン傳 松永文雄君著

○基督教叢書 星野光多君編輯 各一部 定價金廿錢 郵稅金四錢

宣教開始五十年紀念

傳道叢書

星野光多君編輯

▲眞神	▲耶蘇の直說法	▲神の現在	▲運命の信仰	▲久遠實成の基督	▲有情の神	▲信仰は何ぞや	▲最大の學問	▲純福音	▲神を知る道	▲基督教の救	▲生命の福音	▲福音の眞髓
山田寅之助君述	阿部清藏君述	武本喜代藏君述	柏木義圓君述	平田三君述	光太郎君述	大谷虞君述	デフォレスト博士述	星野光多君述	釘宮辰生君述	露無文治君述	今井壽道君述	有馬純清君述

(其 他 續 刊 行)



德興縣志